

介護ニーズ最前線

団塊の世代を知る

第7回

大きな塊に見えて
実はバラバラ世代

今後利用者として「団塊の世代」が激増していくなか、新たな高齢者像を知り、介護ニーズを理解するため、団塊の世代の実情や志向、団塊の世代がもたらす介護現場への影響について解説します。



阪本 節郎

人生100年時代 未来ビジョン研究所 所長

さかもと・せつお ● 1975年早稲田大学商学部卒。株博報堂入社。プロモーション企画実務、研究開発に従事後、企業のソーシャルマーケティング開発を推進。2000年にエルダービジネス推進室、11年に新しい大人文化研究所を設立。さらに、19年に独立し当研究所を創設。現在、所長。著書『50歳を超えたらもう年をとらない46の法則』（講談社＋α新書）『シニアマーケティングはなぜうまくいかないのか？ 新しい大人消費が日本を動かす』（日経新聞出版社、韓国版、台湾版）他

多種多様で

〆勝手にやれば〆

団塊世代とは一つの大きな塊という意味で、実際そういう側面も持っています。それが、わが国で初めての本格的な若者文化を生み出した要因になったことも事実です。しかしながら、もう一つの側面として「団塊バラバラ」ということがいえます。大学紛争のときにも、セクトが乱立し、かつ中心的な活動家是一部で、そこに時として多くの一般学生も参加したために大きな紛争になりました。日常的には、活動家はバリケード、

麻雀学生は雀荘、演劇好きはアングラ劇場とバラバラでした。よく「団塊は小集団でしかとらえられない」という言い方をされたのはそういうことで、多種多様であって、お互いに勝手にやれば、という面があるのです。

なぜそうなったのか。それは、数が多くて小さい頃から競争のなかで生きてきたからです。小学校で階段教室というのがありまして。大学の階段教室とは異なり、人数があふれて1学年6組、7組あるのは当たり前で、教室が足りずに実際の階段を教室代わりにしました。とにかく、自分を押し出さなければ、常にはじかれてし

まう〆環境にいたわけです。これが「俺が俺が〆の団塊世代」を生んだということがいえます。

会社においても、団塊世代の2人がお互い楽しそうに会話をしていると思いきや、それぞれが自分のしたい話を勝手にしているだけという光景もよく見られました。

団塊は理屈好き

しかも理屈好きです。戦後民主主義が定着してくるなか、すぐ上の世代にあった知識人・文化人・教授といった権威が否定されて、一人ひとりが知識を持つ者だとい

う意識が生まれ、競争感覚と相まって「論破」という言葉がよく使われました。とにかく、なんでもいいから相手をやり込めたほうが勝ち、という風潮です。こういう人たちが介護施設を利用するようになると、良きお年寄りなどという話にはとてもなり難い面が出てきます。利用者がうるさくて仕方がない施設になりかねません。

そのうえ、「家族に入れさせられた。なんで自分が入らなければならなかったのか」というある種の被害者意識を持つ利用者は常に一定の割合でいるものですが、その不満のはけ口がややもすると施設側や介護職員に向かってきます。



1960年代後半の新宿は当時の団塊世代によって若者の街といわれました。そこでは日本版ヒッピーと呼ばれたフーテン(写真右、毎日新聞社提供)や一方では新宿西口のフォークゲリラ、そして新宿騒乱事件を起こした過激派の学生(写真左、同社提供)、さらにディスコの前身のゴーゴー喫茶に集まる若者や花園神社では紅テントに熱くなる演劇好きの若者など、多種多様な若者たちがいました。

しかも単に騒ぎ立てるというよりも、理屈で攻めてくるところが厄介で、ただでさえ確保が難しい若い職員が嫌気を起こすということにもなりかねません。

理屈と権威を活用してみる

では、どうすればいいのでしょうか。「理屈には理屈で」がまず考えるべきこととしてあります。つまり、さまざまな事柄について、きちんと説明ができるようにしておくということですね。理屈好きということは、理をもって説明されれば納得する面もあるわけです。したがって、若手職員が常に説明できるようにしておくための研修や日々のミーティングなどが必要でしょう。

また、〃そもそも介護保険制度とは〃とか、〃特養とは〃、〃社福(社会福祉法人)とは〃など、一定の社会知識をもとに理屈をぶつけて簡単には引き下がらない利用者也出てきます。こういうことに対しては、施設長あるいは管理職の出番といえます。権威を否定しながら権威好きというのも団塊世代で

す。二言めには「施設長を出せ」という一方で、話をすれば、多少無理な話でも「施設長に頼まれたんじゃ、しょうがない」というのが団塊世代です。

ただ、すべての利用者に施設長が対応する必要はありません。他の多くの利用者は「勝手に自慢してる」というところなのです。

バラバラ対応が今後の施設づくしのヒント

〃団塊バラバラ〃への対応というところでは、従来のように利用者全員が集まって何かをするということとはあまり必要ないかもしれません。それぞれ小グループで歌好きは歌を歌い、映画好きは映画を観て、麻雀好きは麻雀を、ということですね。

その意味で、レクリエーションの面でいえば、これまでとはプログラムの組み方を変える必要もありそうです。団塊以降は同様の志向性を持つために、今後の基本的なパターンをつくるということにもなり、これからの介護施設のあり方のヒントとなる可能性も秘めています。